

一寸光陰不可軽

人国記

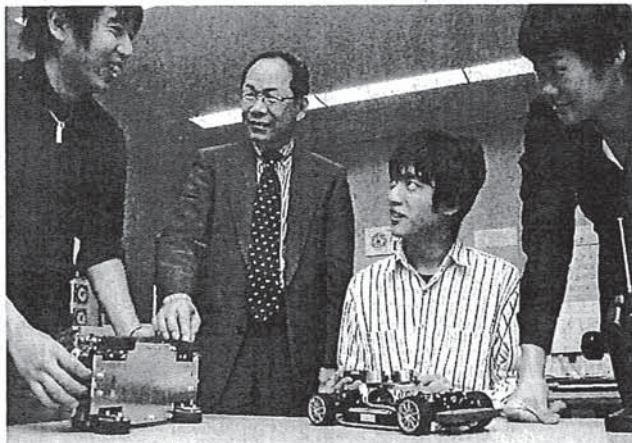
マツダという自動車メーカーに在籍し、世界で最も売れた小型オープンカー「ロードスター」や最も速い量産車「RX-7」をはじめとする乗用車、トラックやワゴン車など商用車の開発・熟成に携わる一方、「ルマン」など国内外でのレース活動にも深くかかわることができました。「技術屋」として生きてきたこの約40年間に及ぶクルマづくりは、やはり「一寸光陰不可軽」。少しの時間も無駄にせず過してきた毎日だったと思います。

きしま おお 貴島 孝雄 (62) ②

元マツダロードスター主査

「他社と同じクルマは作りたくない」というチャレンジ精神にあふれていた。そして、それをやり遂げるだけの粘り強さと技術力がありました。欲を言えば技術屋としてやり残した仕事もありますが、この会社でクルマづくりができて幸せだったと思います。そしてこれからは、「クルマ離れ」「科学離れ」が進んでいるといわれる若者の中に入り、山口東京理科大学の教授としてクルマやものづくりの魅力を生徒たちに伝えていく立場です。

今後のものづくりのあり方を考えるヒントの1つが、時計商だった父親の仕事の中に取りました。ねじ巻きの柱時計は、時刻が1時間に1分くらいずれても愛着があり、生活に潤いをもたら



「ものづくり工房」で学生や教員らと熱い議論を交わす貴島教授（左から2番目）＝山口県山陽小野田市の山口東京理科大学

「感性価値」高いクルマを

らしてくる存在でした。しかし、使い捨て同然の安いクォーツ時計は、いくら精度が高くても愛着などわかず、

「修理して使い続けよう」とは思えない。その違いが、所有することによって機能以外の価値が得られる「感性価値」の部分ではないでしょうか。昔から「匠」が作ってきた今に残っているものは、そういう感性価値をたっぷり含んだ製品だと思います。

今後、自動車はどうなっていくのか。人間にはもともと「速く遠くへ移動したい」という本能があり、その中で「移動する楽しさ」を見いだしていたと思うんです。しかし、今の自動車は、環境への影響や資源の枯渇といった問題を抱えているので、移動距離に応じたすみ分けが進んでいくでしょう。近距離なら電気自動車、長距離なら鉄道、その中間はハイブリッド車、という具合に。これからの技術者たちには動力が何であっても「移動が楽しい」「乗っていておもしろい」と思える、感性に訴えるクルマづくりも忘れないでほしいですね。

◇ このシリーズは小林宏之が担当しました。13日からは元西日本短期大学付属高校校長、須郷昌徳さんです。



九州・山口

産経新聞九州山口版は月ごめ購読料3000円の朝刊紙です。九州山口地域でもご自宅や会社に配達いたします。申し込みは下記のフリーダイヤルか、専用サイトで。

ニュースのご連絡は九州総局

TEL 092(741)7088
FAX 092(726)2572
kyushu@sankei.co.jp

〒810-0004
福岡市中央区渡辺通
5-23-8
サンライトビル3階

山口支局

TEL 083(923)3333
FAX 083(923)3334
yamaguchi@sankei.co.jp

〒753-0074
山口市中央3-6-2

購読のお申し込みは
☎ 0120(34)3733
www.sankei9.com

販売のお問い合わせは
TEL 092(741)2323

広告のご用は
TEL 06(6633)9474